

現代の国際布教活動研究における「四つの架け橋」

“Four Bridgings” of the Research on Contemporary International Missionary Movements

徐 以 驊*

Xu Yihua

〔要 旨〕 20世紀の60年代、とりわけ冷戦終結後、宗教は世界規模で急速に拡大した。国際的な宗教運動や現象が次から次へと湧きおこり、中でも国際的な布教活動の目覚ましい発展が注目を集めている。これは、世界の宗教分布を大きく変容させたばかりでなく、布教活動に対する伝統的な見方やパラダイム形成のあり方を、根底から覆すほどの挑戦でもあった。本稿は、主として現代の国際的な布教活動の発展傾向と国内の学界における布教活動、特にキリスト教の布教活動に関する研究の現状について、「国際的な視野と現代的な関心」および「四つの架け橋」という研究構想の実現を提起し、世界的な宗教復興に対して学術として一層全面的に応えていこうとするものである。

〔キーワード〕 現代の国際的布教活動、宗教と国際関係、「四つの架け橋」

Abstract : The large-scale religious resurgence since the 1960s has brought about all kinds of transnational religious phenomena and movements, and one of the most remarkable movements is the transnational missionary activities of various religions. The fast and robust growth of the contemporary missionary movements does not only facilitate the great redistribution of religions in the world, but also pose a serious challenge to our traditional views and theories regarding the foreign missions. Based on the new development of contemporary missionary movements and also the missiological studies in China, this paper attempts to propose a research scheme of a series of bridgings (such as bridging the gap between the old missiology and new missiology) to further our understanding of the global religious revivals in general and the contemporary missionary movements in particular.

Keywords : Contemporary international missionary movements, Religion and international relations, “Four bridgings”

* 復旦大学アメリカ研究センター教授 (Professor, Center for American Studies, Fudan University)

20世紀の60年代、とりわけ冷戦終結後、宗教は世界規模で急速に拡大した。大規模な宗教復興が伝統的な世界宗教（キリスト教、イスラーム教、仏教など）の間で起こり、また伝統的なローカル宗教、非組織的宗教、民間的宗教、そして新興宗教（ヒンドゥー教、バハイ教など）の間でも起こった。グローバル化とネットワーク媒体により、宗教の原理主義、政治的イスラーム、種族/宗教の社会的分散、宗教NGO、宗教テロリズム、宗教的人権運動など、国際的な宗教運動や現象が形成され、激化されていった。こうした宗教運動や現象の中でも、とりわけ国際的な布教活動の目覚ましい発展が注目を集めている。これは、世界の宗教分布を大きく変容させたばかりでなく、布教活動に対する伝統的な見方やパラダイム形成のあり方を、根底から覆すほどの挑戦でもあった。本稿は、主として現代の国際的な布教活動の発展傾向と国内の学界における布教活動、特にキリスト教の布教活動に関する研究の現状について、以下に述べる「四つの架け橋」という研究構想の実現を提起し、学界の同志からのご教示を請うものである。

一、キリスト教の布教活動史研究から布教活動の現状に至るまでの「旧と新」との間の架け橋

国内の学界におけるキリスト教の布教活動の研究について言えば、歴史研究を重視して現状認識を軽視する傾向が非常に深刻であり、さらにこの両者が基本的に分断されている状況にある。そのため現在では、卓新平教授のような国内の宗教学者が、現代キリスト教の発展について比較的系統だった研究を行っているにもかかわらず、国内の布教活動史研究には現状への関心が往々にして欠けているのである¹⁾。

世界的に見れば、前世紀後半から始まった宗教復興により、キリスト教の布教活動は、世界の中での立場や運動の方向性から、布教戦略などの分野に至るまで、巨大な変化を遂げた²⁾。

* 本稿は、中国教育部哲学社会科学研究重要課題研究プロジェクト「宗教と中国国家安全の研究 (06JZD0005)」、国家社科基金重要課題研究プロジェクト「宗教が現代国際関係に及ぼす影響 (05&ZD013)」、および復旦大学米国研究センター国家哲学社会科学創新基地プロジェクト「冷戦後の宗教と米国の外交 (05FCZD0015)」の中間成果である。

1) 中でも注目すべきは、卓新平著『当代基督宗教教会発展』と『“全球化”的宗教与当代中国』である。前者は2007年に上海三聯書店より、後者は2008年に社会科学文献出版社より出版されている。このほか、涂怡超「現代福音派国際ネットワークの形成及其対国際関係の影響——以葛培理为中心的考察」(徐以驊監修『宗教与美国社会——宗教与国際関係』第四輯上、北京・時事出版社、2007年、pp.234-263)、涂怡超『美国基督教福音派及其対国際関係の影響——以葛培理为中心的考察』(上海・上海人民出版社、2010年)も参照されたい。

2) 宣教学という観点から現代布教活動の発展の趨勢を取り扱った著書としては、Michael Pocock, Cailkyn Van Rheenen and Douglas McConnell, *The Changing Face of World Missions: Engaging Contemporary Issues and Trends* (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, 2005) が参考となる。

アメリカの著名な福音派の牧師であるリック・ウォーレン (Rick Warren) の言葉を借りれば、キリスト教について「過去50年間に、人々は世界史上最大級の宗教の再分布を目撃した」のであり、キリスト教の未来は、先進国ではなく発展途上国の中にこそあるのだ³⁾。キリスト教の布教活動は、第二次世界大戦以来の頽勢を一挙に抜け出たばかりではなく、布教活動史の研究者ラトゥーレット (Kenneth Scott Latourette) が言う「偉大なる世紀」(19世紀)に続く、いわゆる「さらに偉大なる世紀」または「コペルニクスの転回」を迎えたのだ。そしてさらに、キリスト教徒の人口分布においても、その重心が世界の南方に片寄るという構造的変化が生まれている。伝道協会の背景においては、従来型/旧式の伝道協会から、福音/新興伝道協会へと方向性が転換し、布教の指導権についても、外国の伝道協会から現地の独立型伝道協会へと戦略の転換が起こっている⁴⁾。20世紀末、典型的なキリスト教徒は、すでにヨーロッパ人ではなく、ラテンアメリカ人またはアフリカの婦人であった⁵⁾。とりわけ、社会的辺境に属する第三世界の貧困層における増加は著しく、世界の北方に位置する富裕国の中産階級および富裕階級は、もはやその典型ではなくなっているのだ。そして21世紀初め、典型的なキリスト教宣教師ですら、もはや白人男性ではなく、女性や他の人種である可能性が高くなっている⁶⁾。「第三教会の勃興」、「宣教師の人種的変化」、「逆方向伝道」、「移民教会」、「世界キリスト教」、「グローバルキリスト教」、「キリスト教王国」⁷⁾なども、「キリスト教の新たな顔ぶれ」、「世界的宣教

3) リック・ウォーレンは、「1900年の時点では、全世界の71%のキリスト教徒がヨーロッパに居住していたが、2000年には、その比率は28%に低下し、実際に教会に通うキリスト教徒の比率はさらに低くなる」と述べている(同様のデータは西洋諸国の教会および学術出版物において度々登場する)。“The Future with Evangelicals: A Conversation with Pastor Rick Warren, Friday, November 13, 2009,” <http://perform.org/events/?EvantID=221>.

4) 徐以驊「美国新教海外伝教運動史述評」(徐以驊監修『宗教与美国社会—美国宗教的“路線図”』(第一輯)北京・時事出版社、2004年、pp. 320-350)。

5) Dana L. Robert, “Shifting Southward: Global Christianity Since 1945,” *International Bulletin of Missionary Research*, vol. 29, no. 2 (April 2000), p. 50より引用。

6) 中でも女性宣教師の増加率は男性宣教師の増加率よりも高い。涂怡超「基督教福音派海外伝教運動与当代国際関係」(徐以驊ほか監修『宗教与美国社会—当代伝教運動』(第六輯)北京・時事出版社、2009年) p. 32。

7) 現在、学界、とりわけ伝道学界では、世界的な範囲に及ぶキリスト教を基本的に「専門的な表現」で、「キリスト教王国 (Christendom)」、「世界キリスト教 (world Christianity)」、「グローバルキリスト教 (Global Christianity)」の三つに大別している。このうち、西洋諸国にいて支配的であった「キリスト教王国」というモデルあるいはそういう呼称は、地縁政治や経済勢力に根ざしたキリスト教信仰の国際性、キリスト教伝道協会と西洋諸国の地縁政治勢力の拡大との複雑な絡み合いを反映し、もはや明らかに時代遅れとなった。そして第一次大戦後に現れた「世界キリスト教」、前世紀の80年代初期の「グローバルキリスト教」が提唱することも実は大同小異であり、どちらもキリスト教の国際化現象や世界的な範囲に及ぶキリスト教信仰形式の文化的表現に用いられる。そこで強調されるのは文化と神学であり、政治の方向性や世界各地のキリスト教文化の相互コミュニケーション、拡張、学習、総合、変革などではない。これら三つの表現については、Todd M. Johnson and Sandra S. Kim, “Describing the Worldwide Christian Phenomenon,” *International Bulletin of Missionary Research*, vol. 29, no. 2 (April 2005), pp. 80-84 を参照のこと。

の面目の一新」を示す基本的要素となりつつあり⁸⁾、伝道の中心地としての地位も「ボストンとナッシュビルが、ソウルとナイロビに明け渡しつつある」⁹⁾のだ。事実、現在すでに世界で海外派遣されるキリスト教宣教師の人数から見れば、現在、韓国はアメリカに次ぐ第二の大国となっている¹⁰⁾。

20世紀にキリスト教の布教活動で起こった大変動には、ペンテコステ派の勃興もそこに入る。ペンテコステ派は1世紀の長きに渡り力を蓄積し、現地化、自発性、包含性、草の根性、国際性、多極化を特徴とした発展路線で、一躍現代キリスト教の第三勢力となった¹¹⁾。そして、キリスト教の土台が世界的規模で文化圏を越えて転移する「文化革命」を促した。世界全体の推定信者数でも、少なくとも2億人以上を数える。ペンテコステ派は、ヨーロッパとイスラーム世界以外のあらゆる地域において、かつてない規模で拡大している。例えばラテンアメリカのように、プロテスタントの各宗派、特にペンテコステ派の拡大は、現地社会のカトリック教会が認めてきた5世紀にもわたる歴史に挑んでいるのだ¹²⁾。イギリスの著名な宗教社会学者であり、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス名誉教授でもあるデイビッド・マーティン (David Martin) の言葉を借りれば、自発性を持つペンテコステ派の勃興は、「伝道時代の

8) Philip Jenkins, *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity* (New York: Oxford University Press, 2002). 台湾の立緒文化事業有限公司から『下一箇基督教王国』というタイトルで本書の翻訳版が出ている)、および Philip Jenkins, *The New Faces of Christianity: Believing the Bible in the Global South* (Oxford: Oxford University Press, 2006) を参照。指摘すべきは、キリスト教人口の重心が南方に移動しても、神学、機構、経済資源の重点は今もなお「地球の北方」にあるという点である。米国プリンストン大学の著名な宗教学者ロバート・ウスノウ (Robert Wuthnow) 教授は、「新しい布教活動」に関する主要な文献資料すべてについて考察し、キリスト教の布教活動の構造にはとりたてて重大な変化はなく、米国キリスト教会は布教のための人員、資金、人道主義的な援助を提供する計画において、世界第一位を独占しているばかりか、過去のどの時期よりも積極的になっている。筆者の取った2008年2月のウスノウ教授の講演記録より引用。ウスノウ教授の観点に立てば、キリスト教の「布教中心地の南方移動論」を覆すことが可能といえよう。詳細は新著 *Boundless Faith: the Global Outreach of American Churches* (Berkeley: University of California Press, 2009) を参照。

9) Dana L. Robert, "From Mission to Mission to Beyond Mission: The Historiography of American Protestant Foreign Mission since World War II," *International Bulletin of Missionary Research* (Oct. 1994), p. 156.

10) 韓国世界宣教協議会 (KWMA) によると、2007年末現在、韓国の560の教会団体から派遣された16,616人のキリスト教宣教師が世界173の国と地域で布教活動をしており、その規模はアメリカに次ぐ。キリスト教徒の布教に対する情熱、熱意と犠牲的精神から見れば、韓国は世界第一位と言ってもよい。蘇恩仙「韓国基督教海外伝教運動対韓国対外関係の影響——以阿富汗人質危機為例」(復旦大学国際関係与公共事務学院2009年修士論文) p. 10.

11) カトリック、プロテスタントに次ぎ、ギリシア正教、聖公会を上回る第三の勢力。

12) ペンテコステ派のラテンアメリカ、とりわけ中南米における発展については、Ted Gerard Jelen and Clyde Wilcox, eds., *Religion and Politics in Comparative Perspective, The One, the Few, and the Many* (Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press, 2002), chapters 9 and 10. を参照。

終結をも表わしているが、新たなる章の始まりではない¹³⁾。当然ながら、「深い思考を経ぬまま、“ペンテコステ派”という呼称により、拡大しつつある世界のキリスト教を概括する」方法に対し、異議を唱える学者もいるのだ¹⁴⁾。

キリスト教はこれまで何度も中心地の没落と遷移を繰り返している。あるいは現在、20世紀は白人が主導したキリスト教の最後の世紀であったと断言するのは、時期尚早かもしれない。いわゆる逆方向伝道（アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどかつての布教対象国が、欧米という昔ながらのキリスト教国家に布教すること。あるいは地球南部のキリスト教徒が北部の国を布教対象地とすること）も、まだ完全に形作られているわけではない¹⁵⁾。しかしキリスト教に、上記のような新たな布教活動または布教活動の新局面があったことで、布教活動と宣教師にあった従来のイメージが覆されたのは確かだ。布教活動の性質、趨勢、そしてその国内政治と国際関係への影響力に対する人々の理解が、新たな挑戦を受けているのである。キリスト教の重心が南下したこと、より具体的に言えば、カトリック教会の重心がヨーロッパからラテンアメリカに転移し、キリスト教会の重心が欧米からアフリカ、アジアに転移したことにより、「キリスト教がヨーロッパ植民地支配者の宗教であった時代は、いまや急速に遠い過去のものとなりつつある」¹⁶⁾。世界中のキリスト教徒が置かれた立場も、いわゆる宗教による迫害の「被害者」であって、「加害者」ではない、という傾向が一層強まっている。この傾向はかなりの程度で、西洋諸国、とりわけアメリカを起源とするいわゆる国際的、あるいはグローバルな宗教自由運動の発展を後押しする力となっている¹⁷⁾。もしも、かつて「帝国主義というギャンプ

13) David Martin, “Another Kind of Cultural Revolution?” 2008年執筆（正式発表していない）、p.5。訳文の表題「另一類文化革命？——作為基督教第三支重要力量的五旬節派」（『宗教与美国社会——当代传教運動』pp.142-163）。事实上、マーティン教授はペンテコステ派についての評価を若干調整している。2002年発表の著書において、「ペンテコステ派はキリスト教の中でカトリックに次ぐ第二の重要な力」とし、全世界20億人のキリスト教徒のうち、8人に1人（約2億5千万人）がペンテコステ派の信者と記している。David Martin, *Pentecostalism: The World Their Parish* (Oxford: Blackwell, 2002), p.1を参照。

14) “Shifting Southward: Global Christianity Since 1945,” p.57.

15) ジェンキンス（Philip Jenkins）らの比較的楽観的な考え方とは逆に、逆（反対）方向伝道はイギリスなどの昔ながらのキリスト教国家では発展が遅い。非西方教会の布教対象は、本国またはその他発展途上国からの移民であり、いわゆる移民教会と大いに重なり合う。布教の障害となるものとして、現地社会の偏見と蔑視、文化的背景の相違、非西方教会自身の起源、種族、宗派、神学等の分野における多様化と、必要な経済力の不足が挙げられる。孫艶燕「当代英国宣教状況概覧」（徐以驊ほか監修『宗教与美国社会——当代传教運動』（第六輯）pp.99-141）。

16) “Shifting Southward: Global Christianity Since 1945,” p.56.

17) 「宗教の自由」について、これまで世界的にも数値化された指標はなかった。宗教と公共生活に関するピュー・フォーラム（the Pew Forum on Religion & Public Life）が2009年12月16日に発表した、198の国と地域における2006年～2008年の状況についての研究報告によると、世界中の32%の国と地域（64の国と地域）と70%近くの人口が、宗教的に高レベル（high）または非常に高レベル（very high）な制約の中にある。当該研究報告の特徴の一つは、宗教に対する制約を政府（横軸）と社会的制約（縦軸）の二つに分け、その程度も高レベル（high）、非常に高レベル（very high）、普通（moderate）、低レベル（low）

ルの新たな勝負師一人一人が、伝道活動の名のもとに自らの正当性を証明していた¹⁸⁾ と言うのであれば、今日の西洋諸国の政治勢力と宗教勢力は、「宗教の自由」と「宗教的人権」という問題を通じて、国際問題と他国の内政に介入していることになる。

現在、国際的な学術界では、教会史が宣教史に、世界宣教の研究が海外宣教の研究に、そして新たな宣教学が古い宣教学に取って代わり、学術研究の主流をなしている。キリスト教の布教活動は、すでに宗派的な使節伝道が世界共通の使節伝道に、さらには使節伝道の超越へと、その地位を明け渡している。つまり過去の単一的な解釈から、現在では一元性の排除と多元的な解釈へと移行しているのだ¹⁹⁾。時代遅れとなった従来型の「中心—周縁」、「伝道協会—工場」、「西教東漸」、「キリスト教拡大史」、「伝道により支配を受ける」などという研究モデルにしがみついたのであれば、今ある布教活動の現状が正確に反映されないばかりでなく、布教活動の歴史発展の趨勢も十分に解釈することはできないのである。中国のキリスト教史から見れば、確かに中国教会は「告発運動」などの「徹底排除」により「根無し草」の教会になることは不可能だ²⁰⁾。しかし現代キリスト教の世界的情勢と布教活動の発展の趨勢に対する関心を欠くことによって、「例外的」な教会になることもできないのだ。

二、布教活動の研究から国際関係に至るまでの「聖と俗」との間の架け橋²¹⁾

アメリカの著名な宣教史研究者であるビーヴァー（R. Pierce Beaver）は、かつて「南北戦

に分けることにより、ある国の宗教が受けている制約について、「政府による制約が強く、社会的には低レベルの制約」あるいは「社会的な制約が強く、政府による制約は低い」などさまざまな結果が得られることにある。この報告は承認こそされたものの、その内容は宗教が受ける制約の処理という一面に限定され、宗教の開放、多様化、豊かな生活機能などの側面には至らない。また、当該研究報告が拠り所としているのは、主としてアメリカ国務省、アメリカ国際宗教自由委員会、国連の宗教または信仰の自由に関する特別報告官、欧州連合理事会、イギリス外務省、ヒューマン・ライツ・ウォッチ（HRW）、国際危機グループ、ハドソン研究所、アムネスティ・インターナショナルなど、西側諸国の組織や機関から提供された資料であるため、その信頼度は影響をこうむっている。また、当該研究報告は、西側諸国の主流学界が非西側諸国の宗教について認識をより深め、国と社会という二つの側面から宗教の自由という問題を扱うものであるが、両者の間の関係について深く切り込むというものではない。事実、現実の社会においては、宗教に対する政府の高レベルの制約があるときに社会的な制約が低レベルであることは、極めて困難である。詳細は“Global Restrictions on Religion,” Dec. 2009, <http://pewforum.org.docs/?DocID=491>.

18) *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity*, p. 35を参照。

19) Dana L. Robert, “From Mission to Mission to Beyond Mission: The Historiography of American Protestant Foreign Mission since World War II.”を参照。

20) 「根無し草」という表現については、邢福増教授『基督教在中国的失敗?』の「自序」を参照されたい。本書は2008年、香港道風出版社より出版された。

21) この「聖と俗」との間の架け橋という表現については、Andrew Preston, “Bridging the Gap between the Sacred and the Secular in the History of American Foreign Relations,” *Diplomatic History*, vol. 30,

争終結後の長きにわたり、海外宣教は今なお「アメリカが一番心血を注ぎ、また最も持続的に他民族に対する慈善心と利他主義とを示すためのものである。これはアメリカ文化が草の根レベルでこれらの民族に影響を与えるには最も効果的な方法であり、アジア、オセアニア、アフリカ、そしてラテンアメリカの人々の心に宿るアメリカ国民のイメージを形作っているのだ。そして将来も、それは国際関係の中で主要要素でありつづけるであろう」と評論した²²⁾。前世紀の90年代、ボストン大学神学部教授で、「キリスト教重心南方移動論」を提起した主要な学者であるダナ・L・ロバート (Dana L. Robert) も、「使節伝道事業は、アメリカ史における重要な意義を、ますます国際関係の分野の中に見出していくであろう」と指摘している²³⁾。しかし、米中関係史及び東アジア国際関係史など少数分野との関係を除けば、西洋の学界においても²⁴⁾、布教活動と各国の外交政策及び国際政治との関係に関する研究は、今でも「別の道を走る車」のようであり、両者がそれぞれめぐり合うことは極めて稀だ。それはたとえ、宣教学／宗教学と外交政策／国際関係が、中国・西洋の学界いずれにおいても最大の関心を集める研究分野であるにもかかわらず、である。したがって、国際関係学は「布教の場」になるべきであり、あるいは宣教学も国際関係学の「勢力範囲」に含めるべきだと言える²⁵⁾。

20世紀後半から見られる世界的な宗教復興²⁶⁾は、上記の「聖と俗」に対する研究が分離していた状況を変えつつある。大規模宗教それぞれが世界的に拡大したため、国際社会で大規模な「アイデンティティーの変遷」と衝突や対立が生じたことが、学界から一層注目されるようになった。布教活動の研究も、宣教学と教会史という「ゲッター」を抜け出し、外交と国際関係

no. 5 (November 2006) を参照。

22) R. Pierce Beaver, "Missionary Motivation through Three Centuries," in J. C. Brauer, ed., *Reinterpretation in American Church History*, vol. 5 (Chicago: University of Chicago Press, 1968), p. 113.

23) "From Mission to Mission to Beyond Mission: The Historiography of American Protestant Foreign Mission since World War II," p. 156.

24) 王立新『意識形態と美国外交政策——以20世紀美国对华政策為簡案的研究』(北京大学出版社、2007年)。王立新「美国在華伝教運動と中美関係——一箇初步的闡釈框架」(徐以驊監修『宗教と美国社会——多元一体的美国社会』(第二輯)北京・時事出版社、2004年、pp. 299-320)。訳書に李本京監修『美国基督境界対東亜之影響』(台北・正中書局、1991年)がある。

25) ここでは宣教学者ウォールズ (Andrew F. Walls) の同様の表現を使用した。ウォールズは、宣教学は学術界とより緊密に融合し「宣教の場」となるべきと考えている。Andrew F. Walls, "Structural Problems in Mission Studies," *International Bulletin of Missionary Research* (October 1991), p. 150 を参照。

26) スコット・M・トーマス (Scott M. Thomas) は、国際関係分野において「グローバルな宗教復興 (the global resurgence of religion)」という概念に次の定義付けを行った。「グローバルな宗教復興とは、宗教が重要性と説得力を帯び、日増しに重要になってくることをいう。具体的には、個人及び公共生活において、宗教的信念、実践と言葉が日増しに重要となり、宗教あるいは宗教と関係のある人物、非国家団体、政党、コミュニティ、組織が、国内政治において役割を拡大することである。この復興はさらに、国際政治に対して重大な影響を及ぼす、という形で現われる。」Scott M. Thomas, *The Global Resurgence of Religion and the Transformation of International Relations: Struggle for Soul of the Twenty-First Century* (New York: Palgrave MacMillan, 2005), p. 26 を参照。

などのいわゆる主流の学術分野の学者とも一層頻繁に対話を重ねるようになってきている。布教活動が現代の国際関係に重要な影響力を与えることから、復旦大学宗教&国際関係研究センターの涂怡超博士は、キリスト教の布教活動を、21世紀の国際関係における「革命の起爆剤」であり、また「国際関係の宗教回帰」をなす重要な要素でもある、と称した。涂氏は、布教活動が宗教問題を国際化させ、キリスト教会と民族国家および異なる他宗教/民族との、そしてキリスト教内部での緊張関係、さらには衝突・対抗などに対して直接的な役割を及ぼし、かつ西洋諸国による安全戦略の策定に影響を与える要素となる、と考えている²⁷⁾。さらにアメリカ・ペンシルベニア州立大学の歴史及び宗教学教授であり、『次なるキリスト教王国』の著者でもあるジェンキンス (Philip Jenkins) が語ったように、布教と宗教移民運動は、世界的な宗教の大変動を引き起こしたのみならず、世界的な政治変動をももたらしうるのだ。ジェンキンスは、現在全世界の人口上位25ヶ国中、少なくとも10ヶ国でキリスト教とイスラーム教との間に深刻な対立状況があり、そのためこれらの国はすべて「深刻な宗教的衝突の舞台」となる恐れがある、と指摘する²⁸⁾。「世界2000年福音運動 (the AD 2000 & Beyond Movement)」の組織及び参加者は、世界におけるキリスト教の布教の重点は大半が「福音が未だ及ばない地」であり「未伝道の民」がいる、いわゆる「北緯10度から40度に至る窓」(the “10/40 Window”)²⁹⁾ であると訴えている。あるいは現在中国人が主導している「エルサレムへの福音再伝道運動」の範囲にあたる、東アジア/東南アジアから中東を経て北アフリカに至る広大な地域と言い換えてもよい。これらの地域は、北アフリカ、中東から南アジアまでのいわゆるイスラームの弧、または過激主義の弧と多くが交差し、重なり合い、宗教衝突が起こる高度危険地域である。また、過去から現在まで、キリスト教布教活動は、伝道対象国の国内政治と社会文化に重要な影響を及ぼしてきた³⁰⁾。2007年、「アフガン人質事件」により、韓国社会と教会、および教会内部の対立・衝突が引き起こされたのが、記憶に新しい例である。しかし指摘しなければならないのは、国際的な宗教NGOなどの宗教行為を実施する主体と同じように、世界規模の布教活動は、地域、人種、肌の色、そして文化の垣根を越えているということ、そして経済的な権限の付与、社会の改善、認知の解放、政治の民主化、信仰の自由、国際的な救援、

27) 涂怡超『基督教福音派海外伝教運動与当代国際関係』pp.16-53。

28) *The Next Christendom: The Coming of Global Christianity*, pp.166-167 を参照。

29) 「世界2000年福音運動」の主な目標について、また「北緯10度から40度に至る窓」の矩形の一角に結局何か国が入り、人口がどれくらいか、キリスト教徒あるいは福音派がその人口に占める割合が、ここに挙げた「福音が未だ及ばない地」あるいは「福音化最少の地」においてどのくらいか、については、この運動の組織者および参加者それぞれに、さまざまな見解がある。Robert T. Coote, “‘AD 2000’ and the “10/40 Window”: A Preliminary Assessment,” *International Bulletin of Missionary Research* (Oct. 2000), pp.160-166 および Window International Network : <http://www.win1040.com/> を参照。

30) 最新の研究については、Daniel H. Bays and Grant Wacker, eds., *The Foreign Missionary Enterprise at Home: Explorations in North American Culture History* (Tuscaloosa, Alabama: The University of Alabama Press, 2003) を参照。

国際交流、世界的な統治管理および世界平和などを促すといった方面で、過去から現在まで十分に積極的な役割を果たし続けてきた、ということである。

歴史的に見れば、中国に存在するキリスト教の各種伝道協会と中国人教会は、新中国政権の成立によって完全に鳴りを潜めたわけではない。その大半は香港、台湾、東南アジア、さらにはより遠方の地域に撤退し、これにより「対中国宣教」と「中国国内宣教」の範囲が大幅に広がり、第一次・第二次世界大戦期間におけるキリスト教布教活動の国際化を引き継ぐ発展へと繋がっていったのである³¹⁾。キリスト教の中国における布教活動の主旨は、「世界への伝道 (evangelizing the world)」という国際布教活動の重要な一部を形成することにある³²⁾。伝道協会から派遣され、世界各地での布教に従事する宣教師にとって、中国国内での宣教は、必ずしも本人の伝道生活の出発点または終着点ではない。そのため、中国におけるキリスト教宣教史を研究するには、「対中国宣教」と「対中国文化圏への宣教」とについて意見を交わし、かつ「対中国宣教」と「世界宣教」とを結びつけ、より広い視野を持つ必要がある。事実、在中国伝道協会と宣教師の中国からの撤退、およびその経験に対する反省から得られる教訓に関する研究に見られるように、すでに国内には「対中国宣教」に続く発展段階に着目する学者が出てきている³³⁾。しかしそれでもなお、在中国伝道協会と中国人教会の、1949年以降の海外における、地域を越えた国際的あるいは世界的な進化と発展について、また同じ時期の中国国内における宣教と、世界の他の地域、とりわけアジア地域での宣教の比較研究については、学界においていまだ十分な注目を集めてはいない³⁴⁾。そのため、中国キリスト教史研究の現代化と国際化には、発展の余地が多く残されているのだ。とりわけ海外の宗教メディアが注目する、中国人の「再伝道」³⁵⁾分野がその例である。

31) 第一次・第二次世界大戦の間に、キリスト教の布教活動の国際化またはグローバル化の第一波があった。Dana L. Robert, "The First Globalization: The Internationalization of the Protestant Missionary Movement between the World Wars," *International Bulletin of Missionary Research* (April 2002), pp. 50-64 を参照。

32) Terrill E. Lutz, "The SVM and Transformation of the Protestant Mission to China," in Daniel H. Bays and Ellen Widmer, eds., *China's Christian Colleges: Transpacific Connections, 1900-1950* (California: Stanford University Press, 2009), pp. 3-19を参照。

33) 『基督教在中国的失敗?』第四章より。

34) ダニエル・ベイズ (Daniel H. Bays) とエレン・ウィッドマー (Ellen Widmer) は、自ら監修した中国におけるミッション系大学史に関する新著の中で、西洋諸国の宣教師が同時期に訪れた日本及びトルコにおける個別研究についても触れており、中国国内外の布教事業を比較する研究の方向性を明らかにしている。*China's Christian Colleges: Transpacific Connections, 1900-1950*, pp. 267-269 を参照。

35) 「再伝道」、すなわちムスリムへの福音伝道 (広義) あるいは「エルサレムへの福音再伝道運動 (狭義)」の歴史と現状については、黄剣波「自西向東——西北霊工団史述及思考」(李金強、呉梓明、邢福増監修『基督教来華二百年論集』(香港・キリスト教文芸出版社、2009年) pp. 239-256。)及びKim-Kwong Chan, "Mission Movement of the Christian Community in Mainland China: The Back to Jerusalem Movement," to be published (2009) を参照。中国国内における現代中国人教会の海外布教活動の個別研究については、張永広「華福」与新伝教運動」、徐以驊ほか監修『宗教与美国社会——当代伝教運動』pp. 199-226 を参照。

三、キリスト教の布教活動の研究から他宗教の布教活動に至るまでの 「宗教と宗教」との間の架け橋

世界的な宗教復興で最も重要なシンボルの一つは、世界的範囲にわたる各宗教、とりわけキリスト教とイスラーム教の布教活動の復興と持続的発展である。西洋諸国で主導的な宗教（キリスト教、モルモン教など）の南下と東洋諸国で主導的な宗教（イスラーム教、仏教、バハイ教、ヒンドゥー教、道教、若干の新興宗教など）の北上が互いに交差することにより、宗教にさらなる国際的流動現象がもたらされ、世界的宗教のリストの書き換え、拡充がなされた。今世紀初めには、世界的に見てキリスト教よりも急速に発展した宗教がいくつか見られるようになり、これらはキリスト教プロテスタントのいかなる宗派と比べても、さらに広範に分布するようになった³⁶⁾。ヨーロッパの多くの国では、イスラーム教と仏教が、すでにプロテスタントまたはカトリック教に次ぐ信者数を誇る宗教となり、世界の他の地域において存在、発展していく上でも互角の立場を獲得した。中国と中国語圏全体で見れば、キリスト教は19世紀に、他宗教に先駆けて大規模な慈善活動を行ったという先例がある。しかしそれでも、まさにボストン大学のウェラー（Robert Weller）教授が指摘するように、現在では仏教が慈善活動の実践と社会公共財の供給でさらに重要な役割を果たしている³⁷⁾。

改革開放以来、国内の学界は一般にキリスト教の布教活動、とりわけその中国内での宣教史について関心を払ってきた。当該分野、とりわけキリスト教高等教育史などの分野においては、ほぼ一世代の期間内に「研究の中国化」³⁸⁾を実現し、あるいは「学術の進展が主に中国で生じているという第三の段階」³⁹⁾にまで達している。それに比べて、他宗教の布教活動につい

36) イスラーム教は世界204の国と地域、バハイ教は218の国と地域、ユダヤ教は134の国と地域、仏教は126の国と地域にそれぞれ分布している。David Barrett, George T. Kurian, and Todd Johnson, eds., *World Christian Encyclopedia*, 2nd ed., vol. 1 (New York: Oxford University Press, 2001)。

37) ウェラー（Robert Weller）著、汪昱廷訳「中国社会的宗教と公益」参照。「グローバル化時代における宗教と多様な文化に関する国際シンポジウム」（上海復旦大学2009年7月）にて論文提出。ウェラー、汪昱廷「中国社会的宗教と公益」（『北京大学学报』2009年第7期）。

38) Jessie G. Lutz, "The Signification of Historiography of the China Christian Colleges," in Peter Chen-main Wang, ed., *Contextualization of Christianity in China, An Evaluation in Modern Perspective* (Sankt Augustin, Germany: Institute of Monumenta Serica, 2007), pp. 119-149. 文中、ルッツ教授は「中国におけるミッション系大学史の研究は主として、(1)宣教の時代（1925年～1950年代）、(2)挑戦とそれに対する反応の時代（1960年代～1970年代）、(3)中国の歴史的立場からのミッション系大学に対する考察の時代（1970年代末～1980年代）、(4)中国こそを中心とする時代（1980年代以降）に分けられる。」と指摘しており、「現在、第四段階にあるミッション系大学の研究は、西洋の学者から中国の学者へのバトンタッチがさらに加速しつつある」としている。

39) ダニエル・ベイズ及びエレン・ウィッドマー教授は、前掲註に引用した書籍においてこれを指摘している。中国におけるミッション系大学の研究は三つの段階をほぼ終了した。最初の二つの段階における主な成果は、

ての国内学者の研究は、さまざまな事情によりかなりの制約を受けているため⁴⁰⁾、イスラーム教、仏教、道教、バハイ教、ヒンドゥー教など、東洋諸国で主導的な宗教の「北上」についても研究の深化が待たれる。そして「無数の宗教の複合体」、「自由自在」、「多様化、多極化」についていえば、ニューエイジ・ムーブメント⁴¹⁾のような、かつて西洋社会を席卷していた、または現在席卷している各種新興宗教/信仰運動についても研究が不足している。宣教史は事実上ほとんどキリスト教伝播史の別名となっている。世界では、宗教はそれぞれに特徴のある伝道方法とルートを持ち、宗教の伝播により、各宗教間の相互学習と衝突を含むコミュニケーションも、それぞれ程度が異なるものの国際関係に影響を与えている。このほか、国際関係において重要な意義を持っているのは、現在世界中で行われているさまざまな布教活動（あるいは福音伝道、開拓、開墾、外部展開、法を広める、道を広める、衆生を救うなどと呼ばれるもの）は、その大半が国家に従属せず、またその国力にも頼っていない。その中には、所在する国においてなお少数派であり、さらには弾圧を受けるような地位におかれる宗教も多く、なおかつそれらはいかなる形式の植民地主義、帝国主義、拡大主義、過激主義とも全く関わりがない。このことはキリスト教とイスラーム教以外の宗教でとりわけ顕著である。

四、従来型伝道の研究からインターネット伝道に至るまでの 「仮想と実現」との間の架け橋

もし、グローバル化が宗教の流動を後押ししている、というのであれば、インターネットは、宗教改革期以来の重要な意義を持つ、第二回目のメディアと宗教との融合を実現したことになる。そのため、インターネット宗教（または「サイバー宗教」、「バーチャル宗教」ともいう⁴²⁾）がもたらす変革は、「第二次宗教改革」とまで呼ばれる。アメリカの合同メソジスト教会

20世紀の50年代中期～60年代初期に中国キリスト教大学連合理事会（*United Board for Christian Colleges in China*）が組織を立ち上げ、中国におけるミッション系大学について「回顧的色調のある」称賛的な著書を出したこと、20世紀の70年代にルッツ教授による『中国与教会大学——1850-1950』（*China and Christian Colleges 1850-1950*）、フィリップ・ウェスト（Philip West）教授による『燕京大学と中西関係——1916-1952年』（*Yenching University and Sino-Western Relations, 1916-1952*）という開拓的な著書が世に出たことである。第三段階は前世紀の80年代中期から始まった。“Preface: This Volume in the Context of Evolving International Scholarship,” in *China’s Christian Colleges: Transpacific Connections, 1900-1950*, pp. 303-307を参照。

40) この種の著書に次のものがある。蔡德貴『当代新興巴哈伊教研究』（北京・人民出版社、2006年版）、アンナ・セイデル著、劉凌訳『西方道教研究史』（上海・上海古籍出版社、2000年）第八章「中国之外的道教」。

41) ニューエイジ・ムーブメントについては、潘天舒「文化人類学視野中的的美国“新時代運動”」（徐以驊監修『宗教与美国社会——宗教与国際関係』（第四輯下）北京・時事出版社、2007年）pp. 577-589）および羅偉虹「美国的新時代和新宗教運動」（徐以驊監修『宗教与美国社会——多元一体的美国宗教』pp. 238-254）参照。

42) フェリックス・ウィルフレド（Felix Wilfred）「信息社会的宗教与神学」（『宗教与美国社会——宗教

の著名な牧師であるマイケル・スローター (Michael Slaughter) 氏は、「電子媒体が21世紀にもたらした宗教改革は、グーテンベルグの活版印刷が16世紀～17世紀にもたらした宗教改革に等しい⁴³⁾」と述べている。インターネットは、各宗教の伝播に「増幅効果」をもたらし、大衆が宗教活動に参加する機会も大幅に増やし⁴⁴⁾、「神のマイクロフォン」となったのである。インターネットは相対的に敷居が低く、無名の宗教団体や信仰であっても、以前より高い「公開性」と強い「発言権」とを持てるようになった。これは新興・弱小の宗教・信仰団体に発展への大きな可能性をもたらし、なおかつ従来型スタイルの教会には衝撃を与えた。インターネットの「グローバル性」と宗教の「世界性」とが一致し、インターネット宗教に従来のいかなる伝道手段よりも一層効果的に国境を越える能力を与えることになった。事実、インターネットの発展により、少なくともバーチャル空間では、いかなるローカル宗教であろうと、いずれもがグローバル宗教になりうる可能性が出てきた。现阶段で、インターネット宗教は新たな布教手段となったものの、従来型の宗教活動にとってはやはり単なる重要な補完手段でしかなく、今なお実体型の伝道組織の役割に完全に取って代わるには至っていない。しかし新たな伝道組織の主体 (サイバースペースの中の宗教、religion in cyberspace) としてはもちろんのこと、従来型伝道組織の新たな道具 (サイバースペース上の宗教、religion on cyberspace) としても、現在の布教活動においてすでに巨大な潜在能力を示しているのだ⁴⁵⁾。

紙面 (平面) 媒体に続いて出現したラジオ・テレビのような他の新たなメディアと異なり、インターネットメディアは「三つの最」(最も速い、最も広い、最も直接的) と、「三つの無」(法規制が無い、国境が無い、コントロールが出来無い) とを持ち、敷居とコストが低く即時性がある、などの革命的な特徴を備えている。これにより、宗教組織は直接的な伝道能力を高めるとともに、彼らの基礎的な動員力と、政治課題に影響を与え国際的な事業に参加する能力とを高め、世界各地のいかなる宗教問題も迅速に透明化、国際化、政治化することが可能となる。インターネットの無国籍性により、宗派と国境を越えた社会組織への認識を形作ることは、宗

与国際関係』(第四輯上) p. 83。

43) Norman E. Thomas, "Radical Mission in a Post-9/11 World: Creative Dissonances," *International Bulletin of Missionary Research* (Jan. 2005), p. 4 より引用。

44) インターネットは大衆を神や教会から遠ざけたのか、それとも近づけたのか、という討論については、謝潔、黄平「網絡時代的宗教与国際関係——兼論美国宗教的伝播对国際関係の影響」(徐以驊監修『宗教与美国社会——多元一体的美国宗教』) pp. 409-421 を参照。

45) ウィルフレッド教授の見解によると、インターネットにはクリエイティブな機能があり、オンラインでさまざまな内容、パフォーマンスの宗教を作り出すことができる。したがって「サイバースペースの中の宗教」とは「サイバースペースでのみ現れる宗教」を指し、「サイバースペース上の宗教」とは「宗教、教会、個人、組織がインターネットに情報をアップロードでき、そうした情報産業がインターネットの外でも存在するために、インターネット以外からも情報取得が可能であるもの」をいう。「信息社会的宗教与神学」pp. 92-93を参照。インターネット宗教とインターネット宗教が布教活動及び国際関係に与える影響については、徐以驊監修『宗教与美国社会——網絡時代的宗教』(第三輯)(北京・時事出版社、2005年)を参照。

教が世界レベルの問題に参加し、世界的な動員力を持つようになる前提条件である。インターネット宗教の持つ開放性、バーチャル性、越境性と浸透性は、中国においても、宗教活動と出版物とを有形空間と実体形式においてのみ限定する、現行の法律/法規の大部分を、すっかり時代遅れのものとなしたのみならず、政府による宗教とインターネットへの管理の動きに対し、全面的に挑戦しているのである⁴⁶⁾。

現在、中国国内における研究の現状から見ると、宣教学の研究は、主に国内におけるキリスト教の布教活動の歴史のみならず、歴史学そのものも主要な基礎としている。また往々にして神学/哲学などの研究の方向性をも援用している。現代の国際的な布教活動の多様な発展の仕方は、研究者に「国際的な視野」と「現代的な関心」とをより強く求めることになった。布教活動の研究は、学問の上でも従来型宣教学の「ゲッター」を抜け出し、国際関係、社会学、ニュース伝播学、人類学等の学問とより緊密な融合を果たしている。つまり、現代に見られる布教活動の国際化、政治化、多様化、そしてインターネット化の発展から見れば、布教活動の研究範囲を広げ、キリスト教とイスラーム教を含めた現代の各宗教の伝道活動およびインターネットを媒介または基礎とする新しい伝道手段を強化する必要がある。こうして上記の「四つの架け橋」を実現することが、世界的な宗教復興に対して学術が一層全面的に応えていく方法なのである。

46) 謝潔、黄平「網絡時代の宗教与国際関係」(徐以驊監修『宗教与美国社会——多元一体的美国宗教』) pp. 427-432 を参照。